midorinodam.jp

NPO法人
緑のダム
北相模

November 2015 No.407-408

１１月号の１枚：嵐山にローカルテレビの取材が来ました

若者の森つくり、後継者育成へ向けて

本会定例活動の60～70％が若者の参加者

当会が森林整備の活動を始めて15年目の平成23年（2013年）の第11期年度通常総会で「これから15年計画」として以下の２つの計画を採択しました。

１、若者の森つくり、後継者育成
２、富士を源流とする「桂川相模川サプライチェーンモデル構築」

当会の定例活動日は、第一・第三日曜日です。両日を合わせて80人～100人が集まります。他のＮＰＯ団体との際立つ異なる特徴は、若者（中・高・大学生・そのＯＢ）の参加が60～70％なのです。そして、森に来る若者の成長ぶりには毎度、驚かされています。初参加の中学1年生の姿は、本当に子供、子供していて「大丈夫かいな？！」と思います。それが卒業近くになると「これが、あの子だったかなぁ～」と思うのです。

若者の森つくりのリーダーは中学校の教師です。日常生活と異なって森には予期せぬ危険がありますが、中学生参加では怪我などの報告は未だありません。当会立ち上げの時、彼は大学院生でした。教師となった当初、生徒から苗字でなく名前で呼ばれていました。森仲間には生徒から軽く見られているという人もいましたが、私は親しまれていると感じていました。発足18年を経過していますが彼は、結婚して子供が2人います。森でのリーダー振りは、堂々たるものです。今年4月から新しい森を預けました。彼らは、その森を「知足の森」と名付けました。「足りていることを知る、必要なものは最初から持っている」という意味だそうです。

前にも書いたことがありますが、私が韓国に滞在中、農民大会に参加しました。基調講演は、ソウル総合大学の「柳達永ユン・ダルヨン総長」でした。ユン・ソンジャンは「自然と共生する者は、神の事業の代行者です」と言われました。私は、森に参加する子供たちが「神の事業の代行者」と感じています。　石村　黄仁（本会、代表理事）

今月の定例活動

2015.11

11月 1日（第一日曜日）：
小原本陣の森/森林整備、担い手育成、技術向上
知足の森/若者の森づくり
いずれも弁当持参。参加費：４００円
11月15日（第三日曜日）：
相模湖・嵐山の森/里山交流、多様な森林活動
主食・自分のお椀・箸・飲料水は持参。参加費：４００円

[定例活動]小原本陣の森

10月4日（第一日曜日）

夏の暑さが終わりを告げ、秋らしい陽気になってきました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

10月4日に行われた小原定例活動では、緑のダム北相模の石村さん、川田さん、小林さん、角田さんの4名と中学生1名、ForestNova☆が2名、合わせて7名が参加しました。今月は知足の森の活動が行われなかったため、中学生も合流です。活動内容としては、前回に引き続いてハイキングコースに作成した道標の設置作業を行いました。前回、道標を持ってハイキングコースを確認した際に、登る道を間違えてしまったので、今回は全員で慎重に確認しつつ設置作業を行いました。

まずは本格的なハイキングコースに入るための入り口が非常に分かりにくかった為、そこを確認して分かり易いように道標を設置しました。今回のハイキングコース用の道標は下の方が杭状になっていない為、設置する際にはダブルスコップと呼ばれる道具を用いて、穴を掘り設置しました。登るときには正規の道で登る班と、前回の活動時に道を間違えて途中まで登った時に置いてきてしまった道標と、正しい道との合流地点に置いてある道標を回収する班とに分かれて行動しました。正規の道で登る班は、登りながら設置する作業を行いました。2班の合流後、ハイキングコースを上まで登りきった場所から孫山へ向かう道に道標を設置しました。この道は距離があるのと、分かり難く、迷い易い道でした。

今回の作業では作成していた15本全てを本設置・仮設置を完了しました。しかし、実際に設置しながら登った結果、思った以上に迷いそうな枝道が多く、道標が予定以上に必要となり、道標が足りず、道標と道標の間が随分空いてしまいました。

正しい道を確認して判り易く道標を設置したにも関わらず、帰り道で一回迷ってしまいました。途中で気が付いて元の道に戻ることが出来ましたが、15本ではなかなか道が分かりにくかったので、次回の活動からは迷わないために必要な分を追加で作成する予定です。　ハイキングコースの作業では、道がわかり難いということもあって、よく迷ってしまうことが多かったので、これからまた道標を作成するにあたってハイキングコースを地図等で確認してみても良いと思いました。また、最近小原定例活動の参加者が少ないので、少人数でも効率よく作業ができる方法なども模索していきたいです。

中嶋　竜太（Forest Nova）

[定例活動]相模湖嵐山の森

10月18日（第三日曜日）

山の樹々がわずかに色づき始めている。今日は森林整備班の石井さんがお休みのため、昼食用のかどや食堂のスープを車で運ぶことができない。さあ、どうする。やはり手で持っていくしかないだろう。１０リットルはありそうな寸胴鍋ふたつ。ひとつは元山男の小林さんが軽々と下げていくが、もうひとつは美男ゆえに力の足りない他のメンバーが代わるがわる二人がかりで運ぶことに。相模湖駅前から嵐山に着いた時にはひと仕事仕終えた気分であった。

さて、作業をするにはもってこいの日和だ。参加は４１名。今回ははるばる石川テレビからフォレストノバを中心とした本会の取材がある。環境保全に関わる団体を番組で紹介するのが目的。放映は今年中とのことで、実に熱心に各班の活動を見回っている。

お花畑班は先月に引き続き柿の実の収穫と梅の剪定を行う。その傍ら、ふと目を上げるとまるまると太ったジョロウグモが何頭も梅の枝に網を張っていた。クモはその姿形から嫌われがちだが、この虫が元気で暮らしているのは餌になる昆虫が多いということ。つまり環境がよく保たれている証にほかならない。嵐山の森はやはり豊かだ。

木工班も先月同様、材の仮置き場用の柱材のほぞ切りに励んでいる。大工の長谷川さんが朝しか顔を出せなく、後はフォレストノバ、ノバOB・淺野君たちでの作業だが、ここで問題が発生。柱材になんとシックイタケが生えていたのである。もしや材

が腐っているのでは。急いで金属タワシでこすり落としたが、さて。イベントに使う丸太材を取りにきた金子建設さんいわく「伐った木は横にしておくと腐りやすい。でも、これだけ太ければ辺材が少しくらいキノコにやられても強度的には問題ないでしょう」（写真右上）。

森林整備班は「森の積木」のための選木、広葉樹の間伐に専念。場所は養蜂の箱が置いてある辺り。といっても今はもうハチはいない。いつの間にかどこかに散ってしまったらしい。樹冠が繁り、暗い森になってしまったのが原因なのでは、ということで始めた作業である。コナラ、トチノキ、イヌザクラなど計１０本ほど（写真左・中）。おかげで森はずいぶん明るくなった。伐ったコナラにはシイタケ、サクラにはヒラタケを後で植えることにしよう。

昼食後、またふと目を上げると今度はクモではなくノバOBの治田君が倉庫の屋根の上で工具を扱っている（写真右下）。バイオリンならもっと面白いのだが、屋根の補修も大事な仕事。生命の森宣言東京は以前に倒しておいた材の玉切りと搬出。

さて地球環境部には今日は強力な助っ人が加わった。２年前まで北都留森林組合に勤務していた室岡さん。プロ中のプロである。普段は伐れないような径の木に挑戦したいと宮村顧問はやる気満々。現場はかなりの急斜面だが、大人も中学生ももものともしない（写真右中）。

終礼前、生命の森の田崎さんが「変わったチョウがいますよ」と知らせてくれた。何とアサギマダラではないか。日本で唯一渡りをし、ふうわりふうわりと飛ぶ優雅な姿が人気のチョウ。何年も嵐山に通っているが、ここでアサギマダラを見るのは初めてかもしれない。他のメンバーも興味深そう。解散後、栗畑で大きな喚声が上がる。石川テレビによるフォレストノバ集合の撮影であった。お疲れさま。虫も、集まった人々も多種多様な嵐山である。

内野　郁夫（本会、理事）

[報告１]
ForestNova報告

去る9月20日の定例活動の後に、緑のダムの永瀬さん主催の木工教室が小原集会場で行われました。
木工教室では初めに、色々な木材の繋げ方の書かれた紙が配布された後、木材の種類と使う道具（ノミ、金づち、ドライバー等）の説明がされ、その後に様々な木材の繋げ方を教えてもらいました。チップをはめ込むことで木材をつなげる方法、木材の面と面に釘を打つことで繋げる方法、木材を欠けさせてその欠けた所に新しい木材を打ち込む方法など、木ならではの様々な方法があることを知りました。他にも、すでに主催者さんが作った木箱も触らせてもらったのですが、サラサラとした表面や固さと柔らかさを併せ持つ質感、独特のにおいや暖かさなどを感じることができました。

また、講義だけではなく、体験として実際に参加者に釘やチップを打たせてくれたり、ノミで木材を割ったりし、一人1回は木材加工をやることができました。作業中はうまくできる人もいれば苦戦する人もいて微笑ましい空気が流れていました。私も木箱に釘の打ち込みをやってみたのですが、実際にやってみると難しく、まっすぐ打ち込むことが出来ず少し曲がった形になってしまいました。まだまだ実戦投入にはほど遠い

みたいです。ですが、必ず実戦投入できるレベルまで持っていきたいです。なぜなら、この技術が出来るようになれば、後々のイベントや子どもたちへの木工教室で作れる木工作品にも幅が出ますし、木材の素晴らしさを伝えるのに必ず役立つと思ったからです。

この木工教室は、実は初めての取り組みだったようで、永瀬さんが自ら企画してくれたものでした。企画理由は自分の技術を誰かに知ってほしかったからだそうです。このように知識を沢山持っている方から様々なことを教わり、技術として身に付け、森に還元できれば良いなと思います。これからも沢山の方々との関わりを大切にし、より沢山の方々とつながっていきたいと思っています。

望月　健一（Forest Nova）

[連載]

緑のダム、リレーエッセイ

「楽しく、休まず、ボチボチな人々」

知識は経験を超えることは出来ない

先日、民放で放映されたＴＶ番組「沖縄・辺野古基地問題」の中で稲嶺恵一元沖縄県知事がインタビューに答えて、“知識は経験を超える事は出来ない”と述べておられた。

アメリカ極東軍事戦略上重要な基地として位置付けられた沖縄県では、敗戦から70年が経過したにもかかわらず県土の10.2%が未だに米軍基地に占有されており、「基地撤去」をめぐって沖縄県民は地道に息長く諦めることなく戦いを続けてこられた。こうした経験からでてきたのが先の箴言なのだろうと思う。

「沖縄・辺野古基地問題」をＴＶ映像か新聞・書物から得た情報しか知らない私達は、現地で「基地撤去」を求めて稲嶺元県知事及び翁長現県知事を先頭に戦ってこられた県民の経験を超えることは当然の如く出来ないが、稲嶺元県知事が述べられたのはソンナ浅い話では無く、鳩山元首相の様に頭で描けばすぐ実現出来ると錯覚する幼稚性或いは安倍一派の様に理論・経緯を無視して権力を奮って実現させようとする横暴性に対し、70年に及ぶ戦いの経験から勝利を得るロードマップを持っていると言う事なのだろう。

この箴言は人間行動のあらゆる側面に敷衍出来るのではないだろうか？

私が参加している「森のダム」活動でも、例えば樹木の間伐作業一つ取ってもどの様な樹木を間伐の対象とするか？対象とした樹木をどの方向にどの様な切り方で倒すのか？懸り木の処理法は？等々、頭で理解しても実際に作業を遂行する事は難しい。何度かの失敗を経験したからこそ初めて間伐に成功するのだ
と言う事を味わう事が出来た。

「知識は必要ない」という事ではない。「知識」だけでは何事も起こらないし、何事も生じないと言う事だと思う。考えてみれば「経験」をしたことを整理して普遍的に整理したものが「知識」と言うものなのだから、「経験」したものの範囲から「知識」が生じると言えるのでは？

最近の物理学では推論(=未経験)から「知識」が生じている様に思えるが、然しこれも(実験)に依る(実証=経験)が行われなければ認められないのだから、“知識は経験を超える事は出来ない”と言う事ではないだろうか？

井伊　直允（本会、会員）

[連載]
相模湖・若者の森づくりから

秋の香りが深まる今日この頃、皆さまにおかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

さて、9月20日に相模湖の嵐山にて幸まちづくり研究会の方たちとともに合同企画を行いました。この合同企画は11月に行われるネイチャーフェスティバルで使用する鋸引き体験用の丸太の調達と、普段活動している森の視察を兼ねて嵐山で行われました。

企画当日の午前中は嵐山散策を行い、ルートは仮置き場のところからフォレストノバの森から、嵐山の頂上 の順でまわりました。仮置き場では、木材加工について説明した後、ゆっくり視察をしました。また、仮置き場からちょっと行ったところで良い森と悪い森について話した後、養蜂班について話をしました。フォレストノバの森の説明では、木の説明や山主さんの意向、それの意味などを説明した後、頂上へ向かいました。頂上へ向かう途中、水源があるので水源の説明をしました。前日に雨が降っていたこともあり、水源にはいつもよりも水が流れていて説明もしやすく、またイメージも付きやすかったと思います。頂上に向かう道は険しいので、最初の内は話しながら登っていたのですが、途中から話も無くなってきて頂上の近くに来る頃には無言になってしまいました。頂上では相模湖を一望することができるので、その眺めを見つつ小休憩を取り下山しました。

午後はなみすけの森にてネイチャーフェスティバルで使う鋸引き体験用の丸太を選び、運ぶ作業を行いました。なみすけの森にある丸太は太くて長いものが多かったので、運ぶのが大変でしたが、２人1組になって森の入り口まで運びました。丸太は長いものが多かったので半分に伐って運びました。そのかいあってか、11本運ぶことができました。さらに運んだものを車に乗せるのに運んだ丸太だと大きすぎたのでさらに伐ったので総計16本運ぶことができました。

今回は5年ぶりに幸まちづくり研究会の方たちが来てくれたこともあって5年前の相違点などを話してくれました。それを聞くと、変わってしまったところは本当に変わってしまったが、変わっていないところもあったので、森の変化やまだ変わってはいないところを注意深く見て、活動に励んでいきたいと思います。

櫻井　友樹（Forest Nova）

[報告２]
「出張」林業研修を実施

１０月の嵐山の定例活動には、北都留森林組合に勤めておられた室岡さんに来ていただき、「出張」の研修をしていただきました。なぜ「出張」かというと、これまで４年間、２２世紀やまもり再生ネットさまからの助成をいただき、小菅村で林業研修を実施してきました。その際、小菅村で知り合いました室岡さんが嵐山に来てくれた、ということで「出張」です。今回のテーマはずばり、普段切れない木、尻込みしてしまう木を切る、です。現在の作業区画には５２９本のスギヒノキがあり、３３本（今月までで）間伐してきました。この区画は電話線が横断しており、その両側は間伐が進んでいないのです。台風や雪で曲がったり、今にも折れて電話線にかかりそうなときはNTTに連絡して処理してもらうのですが、可能な限り、また技術向上のために自分たちで処理しようとしています。今回も電話線周辺で、かつ太めの木に挑戦しました。

実際の作業はというと、やはり手が入っていないため、５本ほとんどがどこかしらはかかり木になってしまいます。これは自分たちだけではどうしようもない状況です。しか

し、そこはさすがのプロ（本人としては元プロだそうですが）、残ったツルの左右を減らしていき、回して倒すという技術を教えていただきました。参加した中学生も普段なら、受け口の向きや大きさ、切る方向などささっと答えられるのですが、反時計回りに回しながら切るなら、ツルを減らすのはどっち？という質問に大議論。いい勉強になりました。他にも、木を切るために木を切る、つまり、倒す方向にある結果的には切ってしまうだろう木を先に切っておき、その空いたスペースを狙って倒す、という方法も教えていただきました。午前午後わずか２時間ずつの活動でしたが、これほど多くのことを学べるとは思いませんでした。まだまだ切ろうかな、でもちょっとな、という木がたくさんあるので、次回以降の「出張」研修が楽しみです。

宮村　連理（本会、理事）

[報告３]市内小学校の体験間伐を実施

10月23日金曜日に相模原市内の相原小学校の児童が相模湖・嵐山の森で間伐体験しました。今月号では写真でご紹介します。相原小学校には、相模原市と森モノづくり研究所との協働事業で間伐材の机の天板が納入されています。

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前集合してください。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食、第３日曜は自分の食器(お椀・お箸)

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

NPO法人
緑のダム北相模

急がず、無理せず、楽しく、休まず、
ボチボチと・・。
そして、沢山の参加で森は、良くなる。
（台風の日は勉強会開催。１６年間、
一日も休まず“継続は力”。）